

予定調和的な落ちには白ける。

責任能力はないが殺傷能力のある人たち

実際、ミステリの登竜門である「江戸川乱歩賞」では、“他の人が知り得ない業界の情報を取り入れること”が必勝法のように言われていた時期があった。**情報小説**と呼ばれるジャンルがあるが、フィクションであっても、一般的にあまり知られていない世界をリアルに描写することは、それだけでひとつのエンタテインメントになり得るということだ。

エンタテインメントには“推進力”を持つエンジンが必要である。それは本格ミステリであれば「**なぜだろう？**」と思わせる仕掛けであり、ホラーであれば「**どうなってしまったのか？**」と思わせる演出だ。それが読者にページをめくらせる原動力となる。

長編小説の場合は、そうしたエンジンが複数必要であると私は考えている。物語の全体を牽引する大きなエンジンと、要所で作動する“補助ブースター”だ。

弥縫（びほう）

『天使の囀り（さえず）り』で**架空の生物の学名**をつけたことがあった。その名を持つ生物が現実に存在していないかどうかを調べるのに難儀した。このときは、インターネット上に生物の学名を網羅したデータベースを発見し、おかげで確認作業を大幅に短縮できた。

[ここまでこだわるのは自己満足のためでは。完成度を上げたいという欲かもしれない。](#)

たとえば「文子」という名の女性キャラクターが登場する場合。これを「あやこ」と読ませるのか、それとも「ふみこ」と読ませるのかは作者次第だ。正確な呼び方が曖昧なままでは読み手も感情移入しにくいいため、最初の登場時にふりがなを振るなどの措置を講じるわけだが、それでもこうした名前はなるべく避けたほうが無難と言える。

・・・

もし、「文子」という名を用いることに必然性がある場合は、母親に「あやちゃん」と呼ばせるシーンをあえて設定するなど、少しでも読者に理解しやすい演出を心がけるべきだ。

なお、キャラクターづくりで気をつけたいのは、作者にとって都合のいい人物を作ろうとするあまり、**キャラクターが自分の分身ばかりになってしまうことだ**。その結果、主要キャラクターの印象がどれも似通ってしまい、読者が混乱することになる。

そうならないよう、日頃から身のまわりにいる人間をよく観察し、人間の個性について、さまざまなバリエーションをストックしておくことが大切だ。

ヒーローは完全無欠の存在である必要はない。むしろ弱点があることで、読者にとっては受け入れやすくなる。あのシャーロック・ホームズですら、コカイン中毒であるという大きな欠点を抱えているのだ。

たとえば男性が女性キャラクターを措く際、言葉遣いひとつをとっても、「……だわ」とか「……よ」といった口調を使用してしまいがちだ。しかし、当節、**こういう言葉遣いに終始する女性はまずいない**。それでは「若い女性と接点のないおじさんが書いた女性」という印象をあたえてしまう。

「寝食を忘れて一気に読みました」と言われるのは、作家冥利に尽きることだ。私自身、そういう小説の魅力に取りつかれて、作家になりたいと思うようになった。**夢中になって読まれるような作品を書きたいというのは、すべての作家に共通する願い**だろう。

また、誰しも新しい作品に着手する際には、「さあ、これからどれほど面白い小説が誕生するだろうか」と、期待に胸を膨らませるものだ。しかし、**得てして書き進めるうちにその期待感は萎んでいくものである**。そこで直面する失望感で、書くのを止めてしまうことも珍しくない。その意味では、執筆前に勝手に盛り上って幻想を膨らませすぎないこと、というのも後々、筆を止めさせないコツである。

私が推敲の重要性をあらためて思い知ったのは、デビュー作『十三番目の人格 ISO LA』が、角川ホラー文庫から出版されることになったときだった。

佳作はいただいたものの、編集者から何度も厳しい指摘を受け、**自分を否定されたような心境になった**。それまでも自分で読み直して推敲作業をしていたつもりでいたのだが、ゲラに書き込まれた指摘の数々は、思ってもみなかったことが多く、目を見開かされた。

「推敲するとはこういうことなのか」とプロの視点の鋭さに舌を巻いた。

大切なのは自分が「面白い」と感じるアイデアを、最も効果的に物語で見せることだ。もちろん、それができれば最初から苦労はない。日々世界中のクリエイターたちがそのための方法論を摸索しているのだ。

だから、せめて少しでも登場人物を輝かせる方法、少しでも読み手の心をつかむ手法、少しでも快調に筆を進ませる習慣など、あらゆる角度から貪欲にレベルアップに励むべきだ。

リチャード・アダムス「ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち」作中作の効果

「クロイドン発12時30分」ミステリ史に残る傑作

小説はひとりで書くものだが、映画は多くの人の手が加わった作品だ。もちろん中心となるのは監督だが、たくさんのプロたちが集結し、**多彩な知見によって練り上げられている**。そこから学ぶものは多い。ヒントとなる発見も得られるだろう。小説書きが孤独で完結した世界であるのに対して、映画には視野・視点を広げてくれるところがある。さらに、執筆の合間のリフレッシュにもなる。一人ぼっちの物書きにとっては、いいことづくめと言ってもいい。むしろ、小説が好きであれば自然に関心が湧いてくるジャンルなのではないだろうか。

マンガの訴求力というのも、並々ならぬものがある。マンガは小説と違い、そのコマのアングルを自由に決められる一方で、視界に収まることはすべて書き込まねばならない。たとえば学園もので教室内のシーンを書く場合、そこがどれほどの大きさの部屋で、何人くらいの生徒がいま何をしているのかは、すべてを描き込まないまでも、考えて設定する必要があるわけだ。

これは、小説を書くうえで重要なポイントだ。小説は必要最低限のことだけ描写すればいいと思われがちだが、実際には**“書いていない部分”をどれだけ具体的にイメージできているかが、表現の質を大きく左右する**。

小説を書くのは、孤独な作業だ。執筆中は常にひとりで、誰に見張られているわけでもないから、サボろうと思えばいくらでもサボれてしまう。それでも自分自身の尻を叩いてパソコンに向かうものの、まったくアイデアが浮かばず、いたずらに時間だけが過ぎることも珍しくない。

プロ、アマチュアにかかわらず、文筆業にこうした苦労は付きものだろう。パーティーなどで他の作家の方とお会いした際には、「集中力の高め方」「やる気スイッチの入れ方」について意見交換をすることが多々あるが、**特効薬のようなものはない**。

ただ、新人賞の選考委員を務めている経験からいえることは、何よりも大切な**“売り”となる部分が欠けているケースが多い**ということだ。最終選考ともなれば、しっかりとし

た文章でそれなりに読ませる作品ばかりが残る。しかし、そのどれもが読み手に強いインパクトをあたえているかという点を決してそうではない。もし、まったく同じ評価の作品がふたつ残ったら、よりインパクトのあるほうに授賞しようというのが当然の流れだ。つまり、売りがなければ他の候補作に競り勝つことはできないのだ。

しかし、最終候補まで残るようなレベルの作品でも、作者の独善に陥ってしまっている作品は少なくない。とりわけ独りよがりの印象をあたえやすいのは、男性が書く女性キャラクターの言動や思考の描写である。あるいは殺人事件の動機が妙に利他的で、きれいごとで終始し、読んでいて腑に落ちないまま物語が展開していく作品も多い。